

はじめに

平成 25 (2013) 年 10 月 16 日、「10 年に 1 度」の強い勢力と報道された台風 26 号 (最低気圧 930hpa) が伊豆諸島を通過した。この台風により、伊豆大島三原山の外輪山中腹が幅約 950m にわたって崩落し、多くの犠牲者を出した。また、同年 11 月 9 日には台風 30 号 (最低気圧 895hpa) がフィリピン中部を直撃した。その壊滅的な被害状況をみて、あらためて風水害の猛威を感じた。

気候変動との関連から、今後も巨大台風の日本襲来が予想されている。過去の歴史から、今後起こりうる自然災害を知ってもらえるよう、今回はかつて静岡県東部地区に甚大な被害をもたらした「狩野川台風」について紹介する。なお、本文中にある町村名のうち、市町村合併により町村名が変更されている場合は、旧町村名のまま表記した。

1 狩野川台風の降水量と集中豪雨

台風 22 号は、昭和 33 (1958) 年 9 月 21 日グアム島近海で熱帯性低気圧として発生した。日を追って台風は急速に発達し、9 月 24 日には最低気圧 877hpa (当時の最低気圧の世界記録)、中心付近の最大風速 75m/s、暴風雨圏の半径も 400~500 km に及んだ。台風は日本本土に近づくにつれ勢力を弱めたが、秋雨前線を刺激し、「雨台風」として通過地帯及びその周辺部に猛烈な雨を降らせた。特に伊豆の狩野川 (かのがわ) 流域で大きな被害を出したため、気象庁は同年 11 月この台風 22 号を「狩野川台風」と命名した。

被害を出した伊豆地方の降水量は、狩野川上流域で 500~750mm、西海岸の松崎付近から狩野川上流部の天城連峰に沿い、東海岸の伊豆南部へ続く地域も 250~350mm の豪雨となった。この日の天城山は、「1 年分が 1 日にして降った」という、まさにバケツの底が抜けたかのような猛烈な雨となったのである。

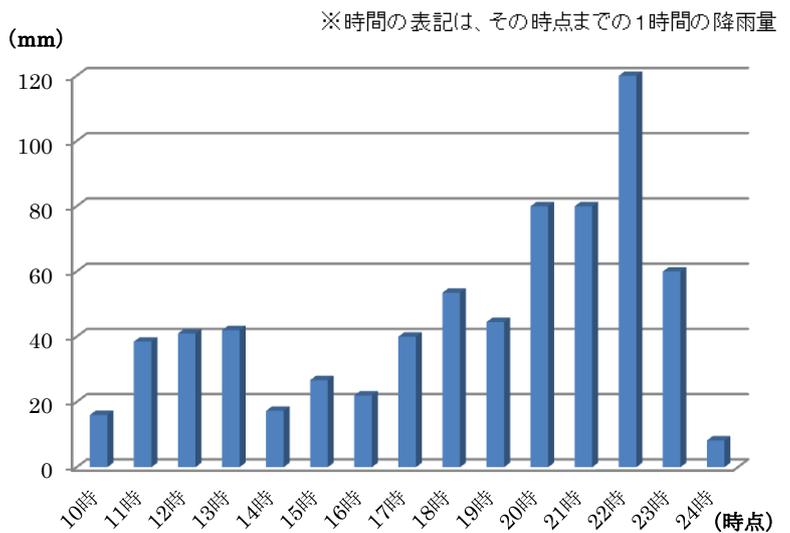
災害の主原因は、豪雨の中心が狩野川の源である上流域にあったことは明らかであるが、単に総降雨量が多かったというだけではない。それよりもむしろ「雨の降り方=雨の強さ」に関係が深い。

多雨域の中心は伊豆半島中央部の天城山付近に停滞しており、顕著な移動がないことが特徴である。時

間的な推移をみると、台風の中心が御前崎の南方約 50 km に達した 19~20 時の 1 時間には 80mm 以上の強い雨となり、この状態は次の 1 時間でさらに強まった。台風の中心が伊豆半島南端付近に達した 21~22 時には最高となり、この 1 時間に湯ヶ島測候所では 120mm の記録的な雨量を観測した。*註 1

狩野川上流域は、大きく狩野川本流と支流の大見川 (おおみがわ) の 2 つに分かれる。両流域ごとの総雨量は狩野川本流が $2.42 \times 10^7 \text{ m}^3$ 、大見川が $2.18 \times 10^7 \text{ m}^3$ となり*註 2、雨の総量はほぼ等しかった。両流域ともに時間雨量が最大に達したのは 21 時から 22 時にかけてであり、この雨水

資料 1 昭和33年9月26日 湯ヶ島測候所 降雨量



が一気に川に流れ込み、ほぼ同時に下流の修善寺橋付近に到達することとなった。しかもこの合流点直下は狩野川が峡谷状をなし、そこに修善寺橋が架かっていたため土砂と流木が集中してダムが形成され、これが逐次決壊して波状的に大洪水が発生したものと推定される。急激にダム・アップされた河水はコンクリート製の堅固な修善寺橋を一挙に流失させて鉄砲水と化し、その急激な押し出しは洪水となって下流域に甚大な被害をもたらした。最盛時の修善寺橋でダム・アップされた川の最高水位は、河床から約9mに達したと伝えられている。

2 狩野川台風被害

(1) 山地の災害

狩野川台風にもなう豪雨によって、上流域では山地の崩壊が数多く発生した。山地崩壊は狩野川支流の猫越川（ねっこがわ）、持越川（もちこしがわ）流域や湯ヶ島周辺に多く、ついで大見川上流域の筏場付近及び八幡から下流域の大見川左岸の冷川（ひえかわ）流域に多かった。

狩野川上流域の崩壊は小規模であったが、大見川上流の筏場（いかだば）付近にある軽石質砂礫層内に発生した崩壊は、著しく規模が大きかった。この軽石質は火山起源の堆積物であり、乾いている時は「つるはし」もなかなか受付けられない程の硬さであるが、いったん水を含むと流動性が大きくなり、その性質が大崩壊をもたらしたのである。筏場での崩壊面積は約6,000㎡、深さ80m、それを容積にすると約48.6万㎡にも達したと算定される。この崩壊した物質の大部分は、わずか1度の洪水で数十km下流にまで流失したことが、その後の調査で確認されている。

(2) 狩野川中・下流部の災害

修善寺橋のダム・アップ決壊の影響をまともに受けた牧野郷から熊坂にいたる区間は、この台風で最も大きな被害を出した。ダム・アップされた莫大な量の河水は、堅固なコンクリート製の橋を押し倒し、兩岸の民家を流し、左岸堤防を破って修善寺町横瀬の北部の集落及び修善寺中学校を押し流した。その時の破壊力や運搬力がいかに大きなものであったかは、150tにも及ぶ橋桁が800mも下流にまで押し流されて



資料2 「駿豆線大仁橋上流の被害」橋本英次氏 提供

いることから想像できる。

修善寺町沖の原は津波状の激流に襲われ、77軒が跡形もなく流れ去り、つづく大仁町の民家21軒も流失した。22時を過ぎた頃、修善寺町熊坂も集落の90%以上（79世帯）を失い、大仁町の中島では民家の約半数が流失した。中島の下流部に当たる白山堂及び御門でも堤防を破った洪水が猛烈な勢いで襲いかかり集落の大部分が失われた。22時55分には修善寺橋から約10km下流の千歳橋上流の堤防が決壊し、それに接した葦山町南条の駅前集落300世帯の大半が流出するという被害状況となった。*註3

この時の体験談を、『狩野川台風手記』で見る。

(3)「生かされて」 佐野 貢（みつぎ）氏著作の抜粋 三島警察署葦山駐在所（自宅）付近の様子
「眠りから覚めると、家の中にはごんごんと水が湧いている。…水はもう胸まで来ている。鼻腔に悪臭を放ってねとつくものがある。誰かの糞便だった。この水は、便所の汚物を始め、ドブ泥、大地のゴミなどあらゆる不浄物が渾然となった汚濁なのだ。…水が階段の最上部に達したとき、ドドーと百挺の掛け矢で物を叩くような音がして、家中の雨戸やガラス戸がはじけ飛び、汚水が奔流となって家の中を流れ過ぎる。ダンスを始め家の中のあらゆる物が一瞬の内に流れ去った…。

2階の窓を開ければどうだろう、目の前に急流が忽然と出現している。いつもは車馬の通う旧下田街道が川に急変してしまった。…目の前を人が押し流されていく。「助けて」と必死の形相でこちらを見る。…流されていく人々の頭へ流木が矢のように襲いかかり、鈍い音を発して人が水中に没していく。舞台劇のように人々は上手から登場し、頭を割られ下手へ退場する。地獄という言葉が私の頭をかすめた…。

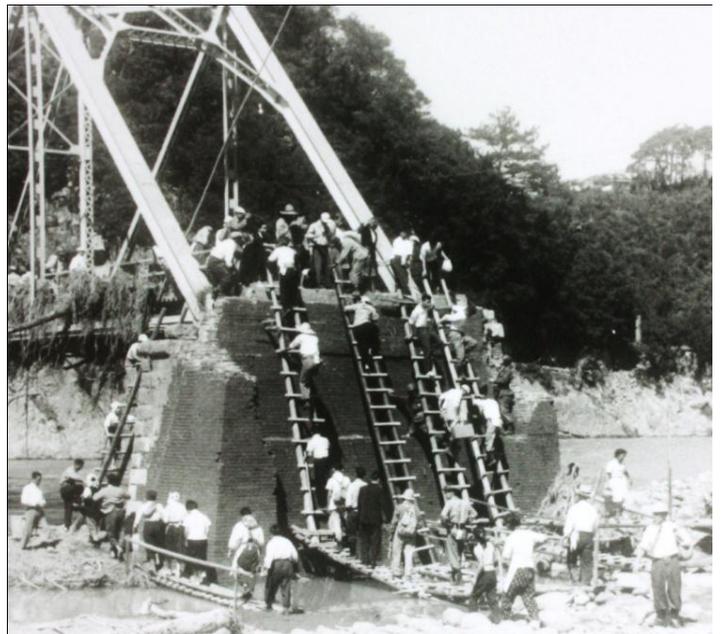
翌日昼ごろ大八車が駐在所（自宅）の玄関に横づけになり、積荷が降ろされた時から私の地獄絵図が現実のものとなった。積荷は死体だったのである。寝込みを襲われ、なすすべなく水魔の牙に掛ったのだろう。どの遺体も着衣をはぎ取られて全裸で、しかも傷だらけ、それが水を含んでぱんぱんに膨れている。…まるで芥川龍之介の『羅生門』で、紛れもない地獄だ。」

この『狩野川台風手記』には、狩野川台風に遭遇された61名の体験談が掲載されている。風水害の恐ろしさを伝える貴重な記録である。

3 復旧事業とその後

被災者の救助活動は翌日未明から活発化し、川船のある者は濁流に流され孤立した人々を次々と救助した。地元消防団が昼夜を問わず働き、御殿場駐屯の自衛隊員も県立葦山高校を拠点としてヘリコプターを用いた救助活動を開始した。民間では、被災しなかった地区で炊き出しが行われ、高校生・中学生はもちろん小学生まで動員された。このように、公共・民間各団体の人的援助も含めて延べ26万人が復旧作業に動員されたことを考えると、改めてその被害の甚大さが分かる。

多くの人々の尽力により、台風通過後約2週間余りで電気・ガス・水道や道路などのライフラインがほぼ復旧し、仮設住宅の建設や道路の整備拡張工事も始まった。この復旧事業の中で最大のものが、狩野川放水路の開削である。狩野川放水路は、狩野川台風の大水害再発を防止する決定策として立案された。伊豆長岡町壺之上（ままのうえ）を水門とし、沼津市江の浦（えのうら）にトンネルを用いて排水するものである。この放水路によって狩野川台風の洪水被災地の堤防決壊などの心配はなくなった。狩野川放水路は昭和40（1965）年に落成し、区画整理事業とともに台風被害の一応の復旧事業は終了した。



資料3 「流された大仁橋」 橋本英次氏 提供

おわりに

狩野川台風は、死者 888 名、行方不明者 381 名、負傷者 1,138 名、住家全壊 2,118 棟、半壊 2,175 棟、床上浸水 132,227 棟、床下浸水 389,488 棟という甚大な被害をもたらした*註 4、被害総額は当時の県予算 1 年分の 230 億円を超えるものであった。

狩野川台風は、天城山の雨量が湯ヶ島において 689.7mm、最大 1 時間 120mm であり、このようなことは気象台発足以来の出来事であった。しかし、歴史を遡ってみると、雨量計のなかった時代とはいえ、この台風匹敵する水害は江戸時代にも発生していることが古文書から見て取れる。

寛文 11(1671)年 8 月 27 日の「寛文亥の満水」、その 120 年後の寛政 3 (1791) 年「寛政亥の満水」(狩野川の増水量 2 丈 3 尺 = 7 米余)。さらに約 70 年後の安政 6 (1859) 年 6 月 24 日には 2 度の「亥の満水」を上回る「巳の満水」が発生している。この時は山津波が激しく、狩野・大見は河原と化し、神島・吉田・御門・白山堂・守木は水没した。この「巳の満水」より狩野川台風まで約 100 年である。これをみると 100 年前後の周期で、このように大きな災害をもたらす台風が、天城山系を襲っていることが分かる。

江戸時代に名主などをつとめた家では、狩野川台風の時でも先祖伝来の古文書をとくに移動もさせず、水に濡らすことなく保全している。また昔からこの流域に住む人々は、水に家屋が浸かっても浮き上がらないようにするため、一階の天井を高くして家を作る。つまり天井に水がつくと浮力で家屋が浮き出し、流れることになるからである。狩野川沿いには川船を持つ家も多く、長年の風水害の体験から、もしもの時にとその教訓が活かされているのである。

50 年以上前に起きた狩野川台風の記憶はしだいに薄れていく。しかし過去の歴史を知り、災害に備える取り組みを忘れてはならない。今後いつ起こるか分からない自然災害に対し、一人ひとりが常に備えを万全に整え、被害を最小限に食い止めたい。自然界を第一に考えた治山治水対策と、災害時にいつでも対処できる防備体制を確立することが、狩野川台風が私たちに教えてくれた無言の教訓である。

*註 1 資料 1 昭和 33 年 9 月 26 日 天城湯ヶ島測候所降雨量グラフを参照

*註 2 河村 武 『狩野川台風による伊豆半島付近の降水量分布』より

*註 3 資料 2 「伊豆箱根鉄道駿豆線大仁橋上流の被害」・資料 3 「流された大仁橋」を参照

*註 4 気象庁公式サイト 災害をもたらした気象事例「狩野川台風」より

【参考文献】

『静岡県史通史編 6 近現代二』 静岡県

『静岡県史別編 2 自然災害史』 静岡県

『韮山町史第 12 巻 通史Ⅲ近現代』 韮山町史編纂委員会

『神島・中島村史』大仁町誌編纂資料第 11 輯 大仁町教育委員会

『災害史』町誌資料第 5 集 天城湯ヶ島町教育委員会

『中伊豆町誌』 中伊豆町教育委員会

『狩野川台風手記』 建設省中部地方建設局沼津工事事務所